山形大学附属博物館報14

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　1988. 3. 1

目　次

台湾故宮博物院 …… (1)
桐製の法螺貝 …… (3)
資料紹介 …… (4)
お知らせ …… (6)

台湾故宮博物院

館長　大津　高

台北市の中心部から中山北路を淡水市に向かって北上し，途中，士林から右（東）に折れると間もなく外双溪という小谷に入る。以前は竹林が多く，僅かの人家が散在するだけのわびしいいなかであったが，昭和23年，蔣介石総統が大陸を追われて渡来し，その時大陸各地の博物館・美術館から集めて持ち込んだぼう大な資料を収める博物館建立の地と定めてから，今も台北市最大の名所としてにぎわっている。すなわち故宮博物院である。

院は小高い丘にもたれた数ヘクタールに亘る敷地に立ち，東端に巨大な南中国式の門がある。門の正面上には蔣総統の名言「天下為公」の大額が掲げられ，本館と共に，淡いクリーム色の粗面の壁が，明るい南国の太陽に照らされ，周囲の深緑の森に映えてまばゆいばかりの美しさである。門から本館まで百メートルほどの通路は，たんたんとして広場を兼ね，本館は中央大楼と左右百メートルほど離れた両袖楼からなり，その間は外観２層，内部はたしか４層，地下２層の巨大な建物となっている。蔣介石は軍人であったが仲々の文人でもあり，かつ大陸的な広大な気宇の持主であるあかしを，新天地台湾の民衆に誇示したものであろう。

昭和40年すぎ，私が初めてここを訪れたころは未だ完成後間もなく，ま新しい館内はどこも光り輝き入館者はまばらで，半日ゆっくり観覧を楽しんで満ちたりた心地で帰ることができた。しかし入館の規制は厳しく，持物（特にカメラ）は全部入口の預り所に置く必要があったが，現在はそんなに厳しくない。数年たつと日本からの観光客がにわかにふえ，毎回必ずいくつかの日本人団体に会った。多くは中年すぎから老人で，ザワザワガヤガヤしながら，日本語は上手だが内容の少ない台湾人ガイドの説明を聞いていた。

その後日本が，大陸の中華人民共和国を全中国を代表する国として国交を開いたので，台湾の中華民国政府はついに日本と断交し，現在は通商代表部，亜東関係協会がとりもつ経済交流だけとなり，国交はなくなった。従って我々が訪台する時は，大てい亜東関係協会から受けた観光ビザで入国となる。私はその国交断絶の日に調査のための渡航をするように日程が決っていたので，１人仕方なく断交後の最初の日航機に乗った。長いＤＣ－８の機体はガランとして，後をふり返ると数十メートルの機体が最後端まで何の障害もなく見透された。台湾人十数人，日本人数人という同乗相

故宮博物院全景（正門から）

客と下り立ち，税関に向かう身は不安で心細かった。しかし約２週間の調査は事なくすみ，最後の日にあちらの仲間と思い出の故宮博物院に訪れたのであったが，そこで日本人の一団体と会ったのである。そして以後は台湾への日本人団体客はやや減ったが，それでも続々会うようになった。

さて院内に入るとそこは他と同じような高い天井の広間で，正面には孫文の大きな立像と中華民国の青天白日旗が飾られており，両側は荷物預り所と売店になっている。売店にはさすがに飲食物はなく，販売品は陳列物の実物写真スライドや絵葉書，そして書画の複製である（最近はジュースなど売られていたかもしれない）。 館内は広々として，陳列棚も比較的余裕をもって並んでいるが入場料が現在でも日本円100円ほどなので，日曜・祭日などはこみ合って落ち着いて観覧できない。特に子供がうるさく，これは日本の子供以上だ。

館内の陳列配置を示す案内はほとんどなく，入館者はただ足でそれを確かめる外はない。左右両翼がそれぞれ3,000平方メートルほどで，たしか4階あるから，とうてい１回でくわしく見きれるものではない。私は恐らく10回近く訪れてはいるが，未だに各陳列分野の位置が定かでない。しかし向って右翼２階あたりに考古的な発掘物が大量に並んでおり，有史前や夏・商時代あたりの物にはいつも感動する。大理石やメノー・玉などを彫った手技は稚拙であっても，ブタやカエルやカメの姿は生き生きとして実に愛らしい。これなら一生そばに置いても見あきはしまい。一方には矢の根石や石斧や骨を砕いただけのサジなどがおいてあり，それを見ると中国の祖先たちは，あの広大な国土の奥まった一隅で，平和な生活を送っていたことがしみじみ想像されるのである。また一方には見事な亀甲文の書かれた亀甲や獣骨がいくつも並べてある。占いなどに用いられたというが，当時の文化が分る。これらは何れも使われた年代が書いてあるが，出土地が明記してあるものはほとんどなかった。

考古部門展示物　商時代

考古部門展示物　殷商時代

やがて時代が下がると共に，種々の銅器や天子王候の権力を象徴する印璽・笏・冠・衣・裳，そしてその時代の女御たちのきらびやかな装身器の数々が見られ，また彼等の使った純金碗や玉器，あるいは金でふちどられた人の頭蓋骨の杯などを見ると，色々な思いがするのは私だけではあるまい。また宗教儀式に使った器具もラマ教・道教・佛教その他各種の宗教でさまざまであるが，特にチベットのものはグロテスクなものが多い。また焼物なども最も古い時代のものから新しいものまで，１階片袖分の広い室内にぎっしりあるのに驚く。

歴史的人物や各時代の芸術家の作品も，広い空間に数多く並べられ，その肉筆のすばらしさはいうまでもない。他に織物・彫刻・漆器なども多く，特に彫刻は竹木はいうに及ばず，骨・象牙・石等の驚嘆に値する物も多い。しかし象牙の多重の篭玉の彫刻などは，さも一片の象牙を彫ったように見せかけてはいるが，どうしても不可能と考えられ，いかに上手に接着してあるかも推察できる。

また常時特別展があり，例えば宋代の花器特集とか，文人がどのようにして修行し王候に仕え，

また人生を楽しんだとかなどを実物で示してあり楽しい。ただ館内各コーナーに置かれてある説明のリーフレットが中文だけだったりし，また英文だけだったりすると我々はそのローマ字が漢字の何をさすのか分からず困ることも多い。以前日本人が大勢見学する時代は日本文の解説が揃っていたが，近ごろ少なく残念である。

何れにしてもこの広大な展示場に陳列してあるのは一部分なのであり，その収蔵品の大部分は地下の収蔵庫に収まっているのであるから，その点数は驚異的な数で正確な数字はつかめていないだろう。しかしその資料分野は`主体が歴史・考古・民俗・芸術・芸能的なもので，自然科学的なものはほとんどない。いわば歴史的な文芸系博物館で蒋総統の人間性がうかがわれる。私は北京の現在の故宮博物院も見学したが，それはいわばもぬけの殻同然で，明・清など近代のものを主体に僅かに残存物を集めた感じであった。今や台北の故宮博物院は全くかけがえのない人類の宝である。訪台の機会には，ぜひ一度足を運ばれることをおすすめする。　（理学部　教授）

桐製の法螺貝

阿　部　八　郎

博物館は楽しいところである。何処の博物館となく，特別展などがあると，ウキウキしながら行く。そして，ついでに，常設の展示物を久し振り，という気持で見てくる。

もっとも，こういう気持は，博物館に限ったことではない。美術館などもそうである。

これらに共通することは，まず，自分が専攻する分野のものでないことである。

稀に，そこに古文書があると，字体，書体，表現，紙質などを見ようとしてしまう。しかし，これも実は，自分の研究には殆ど関係無い。せいぜい，授業などでの話の種にする程度である。

私は，これまで，古典を対象にして，文体だとか，待遇表現（敬語法）などを研究してきた。場合によっては，書誌学的調査とか本文批判などをする必要があって，それが目的で出掛けることもしばしばあるが，行くところは図書館である。

その点，図書館はどうしても，「研究」という目的が第一にあり，緊張感が伴っている。

これとは別に，博物館とか美術館は，専門を離れたもう一つの楽しい緊張感がある。

ところが，今年の夏はちょっと変っていた。この3，4年前から調査している古文書に書かれている「内容」の真偽を確かめる証拠に近いものを見つけたのである。

西置賜郡小国町から少し外れた山間に，「百子沢(ひゃっこざわ)」という土地があるが，ここを舞台にした説話が古文書として残っている。大変面白いストーリーに釣られ，ついつい，翻刻し，注を施し，古老の話を聞いては記録などをした。

物語の中には，いろいろ小道具が登場するが，理解出来ないものの一つに「胡桃皮の法螺貝」というのがあった。初めは，こういう読み方で良いのか疑問でもあったが，どうも，この読み方しか出来ない。また，こう読めても，「胡桃」と「皮」と「法螺貝」が一直線に結び付かない。

まず，胡桃という山の植物と，法螺貝という海の動物が，どうしてここで一つになっているのか，ということである。胡桃の木にも皮はあるだろうが，その厚さなどは想像出来ない。せいぜい想像できることは「胡桃の木」の「皮」を剥いで，これを丸めて，法螺貝の代りにしたようなものがあったのではないかということであった。

他の文献を見ても出てこないし，地元の古老，住民の方々に聞いても，そういう物は知らないという。

ところが今年の夏，調査のため現地に向かう途中で，これに非常に近いものを見つけたのである。

地域的には，百子沢から約30km西になるが，新潟県岩船郡朝日村に「またぎの家」と称する資料館がある。地図に載っていたので初めて知ったのであるが，「またぎ」の生活振りを知りたいと思い，入館することにした。調査中の物語に「またぎ」が関係しているということを予め知っていたからでもある。

玄関口が，資料館の入口になっている。物語の中での事件は，またぎの家ではなく，大庄屋の家で起るが，このまたぎの家は造りが立派で庄屋の家を彷彿させる。登場する女性が，逆さ吊りという折檻に遭うのであるが，どの辺の梁に縄が掛けられるだろう，などと想像しながら見渡すのは楽しいものであった。

と，柱に木製の異様な物が掛けてある。紙に説明があるので見ると，「ホラガイ」とある。

「これだったのか！」と，もう一度改めて見直してみた。形は本物の法螺貝からは程遠い。確かに，口が当る所は細くなってるが，空気の出る所は，本物の法螺貝のような派手な広がりが無い。また，色にしても，本物の法螺貝が持っている奇麗な色彩も無い。煙の中に曝され，また大分使い込まれたと見えて木地が黒光りする所もある。これが，「法螺貝」だという。

ここで，たちまち仕事の血が騒ぎ出し，材質とか，長さとか，使用法などを調べたくなり，係の方に，手に取って見たい旨を申し出る。係の方は快諾され，また丁寧に教えて下さった。

材質は「桐」であった。そこで，胡桃では造らないかと質問したら，材質が硬くて造らないという。それでは胡桃の皮はどうかと質問したが，これも聞いたことが無いという。

計測の結果は次のようであった。

長さ　38.0cm
直径　口側　2.5cm(穴 1.7cm)
　　反対側 9.2cm(穴 7.0cm)

この大きさは中位だということであった。そして，この桐製の法螺貝は，山村では寄合あるいは緊急時に使用され，今でも時折り地域によっては用いられているという。

法螺貝は，もともと山伏が使用するものである。片貝にある不動院当主の談話を伺ったことがあるが，物語の中心地百子沢周辺は，山伏・またぎとの関係が深い地域であるという。

これらの点からみて，百子沢周辺においても，実生活の中で法螺貝が使用されていたであろう事は推測される。しかし，山村であり，本物の海産物を入手するのは困難だったろう。そこで，代用品として，木の内部を切り抜いたものを法螺貝と称して使用していたのではないだろうか。それが，今私が調査している物語の中に採り入れられたものと思われる。

改めて良く見ると，中央部にカット風に帆船が彫られている。いかにも山村らしい，海への憧れが表れている。

惜しいことに，音色は聞かせてもらわなかったが，丹念に探せば，胡桃皮製の法螺貝も何処かにあるのではないかと思っている。

と云うことで，今年の夏はすっかり資料館のお世話になった。この数年間，博物館・資料館が随分設立されたと聞く。かつての，又今の生活振りを後世に伝えることは大変意義のあることである。

1987．11．記

（人文学部　助教授）

資　料　紹　介

植物資料

「黒百合は恋の花か？」

♪黒百合は恋の花♪で始まる流行歌がある。その歌が流れた世相を私は知らない。1954年（昭和29年）菊田一夫作詞・古関裕而作曲によるこの「黒百合の歌」は同じく菊田一夫原作のラジオ小説「君の名は・第２部」の挿入歌である。

この歌は♪愛する人に捧げれば二人はいつか結びつく♪と続く。これはアイヌの言伝えに基づく。それによると，気付かれずにこの花を愛しい人に届ければその恋は成就するという。

更に♪黒百合は魔物だよ。花のかおりがしみついて結んだ二人ははなれない♪と続く．やはり黒百合をこの眼で確かめてみなければならない。伝説の恋の花の香りはどんなものであろうか。

山形県では月山山頂の大群生，僅かではあるが飯豊山の分布が知られている。月山では６月下旬

山頂の雪が消える頃，他に先駆けて草地一面が黒百合に覆われる。草丈10～20cmのこの花の花期は短かく，また花ののち地上部は枯死してしまうため盛夏にはその姿さえ見ることもできない。

さてその花だが，この植物はユリ科のクロユリではあるがヤマユリなどのユリ属とは異なるバイモ（貝母）属に含まれる。学名は*Fritillaria camtschatcensis*である。*camtschatcensis*とは，カムチャッカ産ということであり，*Fritillaria*はラテン語で「丁か半か」の壺に由来する。また蝶ではあるがタテハチョウ科のヒョウモンチョウも英語でfritillaryである。下向きに着く6枚の花被弁は筒状を成し，内部には豹紋を思わせる斑がある。真の黒色は生物界に存在しない例に漏れず，花の色は紫系の茶色である。

本州高山のものは染色体数が2n＝24であるが，低地にも生育する北海道のものは3倍体の3n＝36であり丈は高く花数も多くその色は濃い。前者をミヤマクロユリ，後者をクロユリ又はエゾクロユリとして区別する場合もある。

この花の香り（？）であるが，少なくとも初恋を象徴する柑橘類とは別世界の類いである。

クロユリ
Fritillaria camtschatcensis (L.) Ker-Gawl.
1986．6．27．月山山頂付近にて

黒百合は古くから中部山岳に多くの生育地が知られている。立山には富山城主，佐々成政滅亡に関した物語があり，成政に殺されたその妾，小百合の怨みの籠められた黒百合が登場する。

羽黒の山伏には「黒百合姫の祭文(さいもん)」という伝承がある。これは1600年頃の秋田，山形が舞台となり，藤原秀衡縁の女系で継がれてきた鳥海山女別当の末裔，そしてまた安部一族の矢島五郎の娘でもある小百合姫が主人公である。

矢島家は亡び，生立ちすら知らない姫は16歳の時あげ羽の蝶の君と契り緑丸を儲ける。後に自らの秘密を知った姫は家再興を鳥海山麓の鶴間ヶ池の山百合に乞う。するとそれらは一斉に黒百合に咲き成攻を告げるのである。勝利を確信した姫は矢島を滅した仁賀保の城を攻めるが，その時降参を申し出た城主，仁賀保蔵人こそあげ羽の蝶の君その人なのである。

この様に極めて劇的な結末を持つこの物語は，鶴間ヶ池には今日も黒百合がむかしのまま咲いている……と終る。しかし現在この池を始め鳥海山の何処にも黒百合分布の報告はない。標高1,000mに満たない鶴間ヶ池周辺には無理があるが，あるいは1801年（享和元年）の鳥海山大噴火以前，この山の何処かに黒百合が生育していたのかも知れない。柳田國男は著作の中で山形の黒百合に立山から移植された可能性を述べている。これについては生物学的比較調査によって何らかの結論が得られるであろう。

本館所蔵の植物腊葉標本には1941年7月9日および1959年7月17日月山採集のもの，1959年6月14日飯豊山採集のものの3点が保存されている。何れも貴重な資料である。

最初に述べた「黒百合の歌」は♪黒百合は毒の花，アイヌの神のタブーだよ♪と結ぶ。しかしその姿にそぐはず，毒草ではない。アイヌの間では黒百合をハップまたはアンラコルなどと呼び食用にしていた記録がある。

果たして黒百合は恋の花なのであろうか。

人の生涯に咲く最も華やかな事件，そしてそれをも含め時としてその裏面に宿る悲哀や怨念までも知っているこの花こそあるいはほんとうの恋の花なのかも知れない。

奥羽霊山の春，嶺嶺がまだまだ白く，行者やハイカーも疎らな頃，山頂を彩る訳でもなく，雄弁に語るでもなく，遥か下界を眺めるようにして伝説の花が今年も咲くことであろう。

月山の取材に際し頂上小屋の芳賀竹志氏から絶大の御協力をいただき，また本稿のため中澤信午名誉教授より参考資料を，大学院学生安藤司氏から写真撮影に関する協力をそれぞれいただいた。心から感謝の意を表したい。

（附属博物館　山崎　　裕）

昭和62年度

公開講座・特別展を終えて

公開講座「光 と 生 活」

今年度の公開講座は，古来より希望と美を表す代名詞となって，最近ではレーザー光線や光ケーブル等として人間社会に利用され，我々の生活に密着している「光」について，自然科学・人文科学の両面から理解を深めることを目的に開講されました。期間中は受講者の出席率も例年になく高く，熱のこもった講義が展開されました。

講義科目及び講師

回 月 日	講義科目	時間	官職氏名
第 1 回 9月19日	開講式	30分	
	光と物理学	120	教養部助教授 加藤静吾
	光と生物の形態形成	〃	教育学部教授 大瀧 保
第 2 回 9月26日	古代日本文学と光	〃	名誉教授 後藤利雄
	仏教美術における光の表現	〃	教育学部助教授 麻木脩平
第 3 回 10月3日	光と化学	〃	工学部教授 横田俊幸
	西洋美術における光の表現	〃	人文学部教授 宍戸 直
第 4 回 10月17日	未来を拓く光：レーザー	〃	工学部助教授 丹野直弘
	住生活と光	〃	教育学部教授 金子幸子
第 5 回 10月24日	光って何だろう	〃	理学部助手 吉成武久
	白内障と視覚	〃	医学部助教授 浜井保名
	終了式	30	

特別展「光 と 生 活」

公開講座「光と生活」の延長として開催された本展は，上記講座の内容を実際の資料を用い広く一般に紹介したもので，光についてその原理から光を用いた道具等を解説展示しました。

1．期間　昭和62年11月4日(水)から14日(土)まで

2．内容

Ⅰ　光って何だろう

指導：吉成武久（理学部）

・プリズムによる分光実験（実演展示）

・蛍光物質と蛍光検査灯　（　〃　）ほか

Ⅱ　住生活と光

指導：金子幸子（教育学部）

・民家とあかり―田麦俣の集落景観ほか（写真）

・照度計，裸電球　ほか

Ⅲ　光の利用

指導：大津　高（理学部）

・乾板カメラ，セミ判スプリングカメラ，二眼レフカメラ，35mm一眼レフと交換レンズ群，ビューカメラ・リンホフ　ほか

・遠眼鏡（とうめがね）（寛政年間のもの）

Ⅵ　昔の光 ―江戸時代のあかり ―

本館所蔵の灯火器を展示

・折櫨灯（せっかんとう），松灯台（まつとうだい），有明行灯（ありあけあんどん），筒提灯（つつぢょうちん），弓張提灯（ゆみはり），石油ランプ各種　ほか

長崎一流蝋燭秘伝（寛文10年）

電球（明治期のもの）

Ⅴ　生物と光

指導：大瀧　保（教育学部）

・ミズタマカビの胞子放出実験

・ヒゲカビの顕微鏡下観察　ほか

昭和62年度学芸員資格取得のための博物館実務実習実施者

学　部	履修者数	合　計
人文学部	41	67人
教育学部	11	
理学部	15	

昭和61年度見学者総数

一般成人	個人	465（人）
	団体	35
大学生	個人	370
	団体	152
児童生徒	個人	9
	団体	0
合計	個人	844
	団体	187
	総数	1,031

山形大学附属博物館報　№14　1988．3．1 発行
編集兼発行人　山形大学附属博物館
（〒990）　山形市小白川町1丁目4－12
☎0236－31－1421（内）2921